

令和4年度

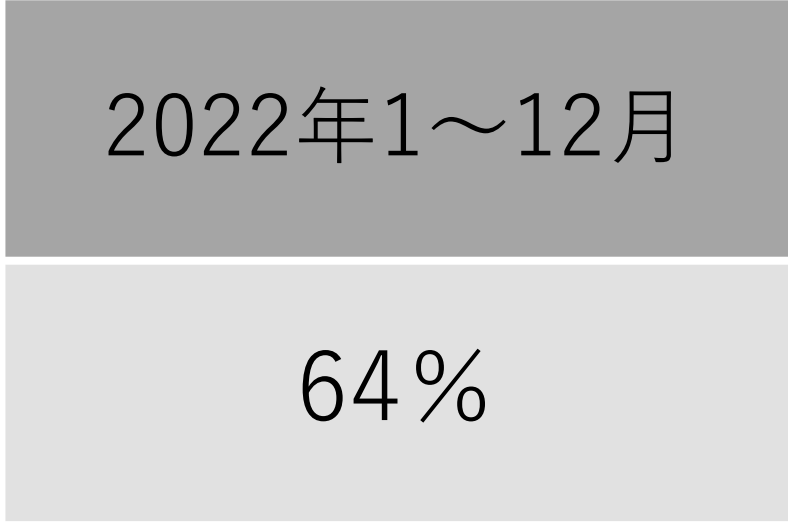
自治医科大学附属病院
病院独自指標



STEMI症例の病院到着から再灌流までの時間<90分達成率 (Door to balloon time)

部署名：循環器内科

急性心筋梗塞の患者さんが病院に到着してから再灌流療法が開始されるまでの時間のことをいいます。Door to balloon timeは短いほど予後が良く、「90分以内」であることは、病院の循環器救急体制の総合力の高さを示す指標になります。



2022年1～12月

64%

【コメント】

年間を通じての Door to balloon time 90分以内達成率は64%でした。これからも、救急診療に携わる全ての職種力を集結させ、Door to balloon time短縮に向けて24時間365日断らない体制で急性心筋梗塞患者さんを受け入れていきます。

外科手術における合併症の発症率

部署名：消化器外科

外科手術件数の確保とともに手技、成績の安定化、手術合併症の減少は医療の質、治療成績の向上に寄与する。

	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
手術件数	1187	1090	1115	1112	1096	1197
合併症率	16.9	19.6	11.7	7.4	3.6	5.2

【コメント】

今後、手術件数の増加、合併症率の低下が病院における質改善指標の一つになると考えられる

造血幹細胞移植後生存率 各疾患ごとの3年生存率

部署名：血液科

高度医療である造血幹細胞移植は造血器腫瘍に対する根治的治療法であり、地域の中核病院としての役割を果たす上で、その治療成績は重要な意味を持つ。

2014年～2021年	
急性白血病（低リスク）	63.4%
急性白血病（高リスク）	28.2%
骨髄異形成症候群	42.1%

【コメント】

低リスク白血病に対しては優れた成績が得られているが、高リスク白血病や骨髄異形成症候群については全国的な治療成績と同等であるが、より高い治療成績を目指して改善を図りたい。

SLE患者に対するAnifrolumab投与によるプレドニゾン減量率

部署名：アレルギー・リウマチ科

プレドニゾンは多くの疾患で投与されるが、その副作用は多岐にわたり、時にQOLまでも低下させてしまう。そのため、疾患活動性を抑えつつプレドニゾンを如何に減量するかが大きな課題である。

	2023年4月	2023年5月	2023年8月
PSL減量率	28.7%	29.4%	34.1%

【コメント】

Anifrolumabは、再発が多いSLEの活動性を抑え、高いプレドニゾン減量率が得られていることから、診療における質的向上の指標の一つになると考えられる。

放射線治療全患者のうち高精度放射線治療を行った患者の割合

部署名：放射線治療科

2020年	2021年	2022年
21.0%	28.0%	32.0%

【コメント】

近年、放射線治療技術の発展に伴い、よりピンポイントな治療が可能なIMRTや定位放射線治療といった高精度放射線治療が普及してきています。高精度放射線治療は、治療成績の向上や病院収益の改善が期待できます。当院では放射線治療機の更新に伴い、高精度放射線治療件数が上昇することが見込まれます。経年的に高精度放射線治療割合を確認することは、放射線治療部門における質改善の指標となると考えられます。

反復経頭蓋磁気刺激(rTMS)療法の新規導入実績

部署名：精神科

rTMS療法は治療抵抗性うつ病に対する新規治療法であり、2019年6月に保険収載された。当院精神科では2021年1月より保険適応機種が導入され、診療を開始している。

2021年	2022年	2023年（4～7月）
5件	10件	5件

【コメント】

rTMSはコストの問題から導入医療機関が限定されている(栃木県内で二箇所)。rTMSの新規導入実績は治療抵抗性うつ病の治療実績、近隣医療機関からの紹介実績を反映すると考えられる。

四肢骨転移、脊椎転移に対する整形外科手術件数

部署名：整形外科

がん患者の生存率が向上する中、四肢骨や脊椎への転移によるADL低下への対応が迫られている。当科としては骨転移カンサーボードを立ち上げにより、各診療科・各部署との良好な連携が築かれてきている。この結果、確実に増加する骨転移患者に対して迅速かつ適切な対応が迫られている。そういった当科に求められた役割に適切に対応できているかどうかを測る一つの指標である。



【コメント】

複数診療科の連携により、手術が必要な骨転移症例を見逃さないこと、手術が必要な症例に対して、適切な時期に手術を施行することが重要である

肝移植手術数からみる今後の診療戦略

部署名：移植外科

当科はこれまで小児肝移植を中心に診療を行ってきたが、2019年に診療科長が交代後は成人肝移植にも積極的に取り組んできた。学会や近隣施設で広報活動を行う事で、成人だけではなく肝移植症例数が全体的に増加傾向にある。

	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
肝移植手術総数	12	13	16	11	16	11	20	21	21
小児肝移植	11	11	9	7	7	6	13	3	4

【コメント】

診療体制変更直後の2020年は年間11例と移植症例数も減少したが、その後紹介症例も増え2021年以降は20例以上の肝移植を行う事ができた。一方、少子化などを理由に小児の肝移植症例数は横ばい～減少傾向である。今後は、さらに成人の肝移植に力を入れていくとともに、当科の目玉である小児肝移植までバランスよく診療科が行えるよう心掛けていく。

リハビリテーション実施件数

部署名：リハビリテーションセンター

入院による安静臥床を原因とする歩行障害、下肢・体幹の筋力低下などの機能障害は、入院関連機能障害と呼ばれ、全入院患者の30～40%に発生すると言われている。リハビリテーションは在宅復帰・ADL改善を目的としており、実施件数はその予防への取り組みと考える。

患者数	2,022	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年間	傾向
診療日数		26	26	26	25	26	24	25	24	24	24	22	26	298	
(理学)															
脳血管		1,135	1,021	1,165	999	1,009	1,059	1,069	999	838	979	1,075	1,085	12,433	
運動器		1,011	849	892	965	1,021	970	868	839	868	867	840	976	10,966	
呼吸		176	118	141	144	191	164	175	193	188	220	127	148	1,985	
心・大血管		612	628	670	509	672	615	682	794	687	598	587	661	7,715	
廃用		596	588	605	556	471	466	556	621	558	524	623	737	6,901	
がん		80	105	106	80	66	70	104	85	63	64	72	88	983	
早期離床リハ		219	209	254	287	326	230	274	258	301	284	287	231	3,160	
小計		3,838	3,537	3,852	3,554	3,761	3,587	3,744	3,798	3,513	3,550	3,619	3,945	44,298	
(作業)															
脳血管		1,029	1,175	1,265	1,022	1,116	1,155	1,165	1,175	1,064	1,203	1,200	1,285	13,854	
運動器		257	191	251	260	305	232	236	268	278	268	191	316	3,053	
呼吸		6		19	12	19	35	28	19	1	6	8	5	158	
心・大血管		43	39	56	23	26		17	17	35	47	44	67	414	
廃用		98	85	80	86	82	88	112	110	138	95	122	116	1,212	
がん						1					1	1		1	
早期離床リハ				3		2		6	1		3	2	1	18	
小計		1,433	1,490	1,674	1,404	1,556	1,513	1,569	1,597	1,522	1,631	1,582	1,796	18,767	
(言語)															
脳血管		444	468	587	509	584	476	533	535	470	450	508	617	6,181	
がん/呼吸				20	45	82	101	86	84	110	120	105	97	850	
摂食		198	192	157	107	128	76	116	119	82	74	91	49	1,389	
聴力・心理		87	72	93	80	82	89	95	70	96	86	78	93	1,021	
音声・音響											10	14	6	10	
小計		729	732	857	741	876	742	830	808	758	740	796	862	7,073	
患者数/日		231	222	246	228	238	243	246	258	241	247	273	254	235	
リハ総計画書		697	687	757	678	717	670	747	753	733	774	709	789	8,711	
合計		6,000	5,759	6,383	5,699	6,193	5,842	6,143	6,203	5,793	5,921	5,997	6,603	70,138	

【コメント】

病院におけるADL改善・早期退院の一つの質改善指標になると考えられる。

早期離床リハビリテーション実施件数

部署名：リハビリテーションセンター

早期離床リハビリテーションは、48時間以内の介入と多職種での計画書作成が義務付けられており、実施によって、生命予後やADL改善・在院日数の短縮が報告されている。早期離床の取り組みの少なさは、ADLや在院日数に影響すると考えるため。

2,022	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年間	傾向
診療日数	26	26	26	25	26	24	25	24	24	24	22	26	298	
早期離床リハ	219	209	254	287	326	230	274	258	301	284	287	231	3,160	

※2022年度データ

【コメント】

病院におけるADL改善・早期退院・チーム医療推進の一つの質改善指標になると考えられる。

外来手術件数

部署名：歯科口腔外科・矯正歯科

他院から紹介頂く外来処置内容のほとんどが外来手術であるため、外来手術件数は地域における当科の診療意義や信頼指標に繋がる。



【コメント】

今後、外来手術件数の大きな増減がないこと、もしくは増加が病院における一つの質改善指標になると考えられる。

病理診断報告のTAT(Turn-Around-Time)

部署名：病理診断部／科

病理診断は疾患の治療方針決定に重要な役割を果たしており、診断結果をより早く提供することで、診療科では患者へのより適切な対応が可能となります。一方、診断報告の遅延は診療の遅延につながり、治療のタイミングを逸する場合も生じ得ます。検体受付～診断報告までのTATを導入し定期的なデータ収集と分析を行い業務フローの見直し、短縮可能な作業時間や遅延の原因を特定していくことで、それらに対する対策を取れる可能性があります。

検査項目名	設定された所要時間	許容値	4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		1月		2月		3月	
			結果	評価	結果	評価	結果	評価	結果	評価	結果	評価	結果	評価	結果	評価	結果	評価	結果	評価	結果	評価	結果	評価	結果	評価
術中迅速 (組織診)	30分	40分	17.0	○	17.0	○	15.0	○	19.7	○	16.8	○	20.0	○	16.7	○	17.2	○	16.7	○	16.7	○	16.9	○	17.6	○
術中迅速 (細胞診)	30分	40分	27.0	○	24.0	○	21.0	○	27.0	○	25.0	○	26.0	○	23.3	○	24.0	○	24.5	○	27.2	○	21.5	○	24.0	○
消化器生検	7日	10日	7.1	○	6.6	○	6.3	○	6.3	○	6.3	○	7.2	○	6.7	○	6.1	○	6.9	○	6.4	○	6.0	○	5.8	○

※2022年度データ

【コメント】

目標としては、病理診断業務ごとに適切な目標値を設定する必要がありますが、時間の限られた術中迅速診断や比較的検体数の多い生検検体などから行い、全生検検体、手術検体に適応を広げていきたいと考えています。ただし、検体毎のデータ収集は、その作業自体が律速段階になる可能性がありますので、年間の中でいくつかのデータ収集の時期を決めて行う予定です。

レスパイト入院

部署名：小児科

子ども医療センターは県の支援をうけており、たん吸引や人工呼吸器の使用など、日常生活において医療的処置やケアを必要とする医療的ケア児のレスパイト入院を積極的に受け入れている。

令和4年度 レスパイト入院数

2022年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間合計
難病（成人）	1	0	1	0	1	2	1	1	0	1	0	0	8
小児慢性	0	2	3	1	2	1	2	1	4	2	1	1	20
月毎合計	1	2	4	1	3	3	3	2	4	3	1	1	28

【コメント】

子ども医療センターとして、県の付託にこたえるとともに、病棟稼働率の上昇につながる。今後も医療的ケア児は増加することが予想され、地域医療への貢献も大きい。

先天性心疾患に対する心臓血管手術死亡率

全国平均 1.41% 胸部外科学会2019年学術調査

部署名：小児・先天性心臓血管外科

2021年	2022年	2023年
0%	0.99%	0.99%

※各年1月-12月でデータ抽出

【コメント】

全国的にもトップクラスの手術成績を維持し、さらなる診療の質向上を目指す。

出生体重群別の人工呼吸管理数・生存退院数とその割合

部署名：NICU

出生体重が小さい程、新生児合併症はより重症であるが、気管挿管を伴う人工呼吸管理率は重症度の指標となる。出生体重群別の年間出生数と生存退院率はNICUの医療の質の総合的指標として広く用いられる。

2022年1～12月			
出生体重群	入院数	気管挿管を伴う人工呼吸管理数 (%)	生存退院数(%)
<500 g	1	1(100%)	1(100%)
<1,000 g	15	12(80%)	15(100%)
<1,500 g	15	9(60%)	15(100%)
<2,000 g	49	20(41%)	49(100%)
<2,500 g	95	29(31%)	94(99%)
2,500 g ≥	192	57(30%)	190(99%)

【コメント】 2022年は生存退院率が高く維持できた。今後の経年的な良好な生存退院率の維持が、診療の質の維持と改善の必要性の指標となると考えられる。

他科コンサルト数

部署名：子どもの心の診療科

子どもの心の問題は、自傷・拒食・過量服薬などしばしば身体症状を合併するため、小児科等の身体科と連携しながら治療に当たる必要がある。コンサルテーション・リエゾン、センターにおける当科の重要な役割の一つである。



【コメント】

これまで外部からの初診数については集計されてきたが、他科コンサルト数は適正に評価されてこなかった。当科の担うべき役割の指標として、身体科と共同して治療を行った件数を採用したいと考えた。

専門外来(嚥下障害および口蓋裂外来)への再診患者数

部署名：小児歯科口腔外科

摂食嚥下や口蓋裂外来の患者様は乳幼児期から成人になるまで症状や年齢に応じて必要な処置を必要なタイミングで行っていくため、患者・家族の治療に対する理解とラポールの形成が非常に重要となる。

2022年1～12月	
摂食嚥下	321件
口蓋裂	606件

【コメント】

今後、患者数の大きな増減が認められないことが病院における一つの質改善指標になると考えられる。